

祈祷と無祈祷(二)

——キリスト教と親鸞教の対比——

小畑進

〈承前〉

第六章	祈祷禁止をめぐって	……	82
(1)	徹底せる罪悪観のゆえに		
	——普賢大圓の所説——	……	82
(2)	常に二重の赦しが		
	——カルヴァンの所説——	……	85
第七章	キリスト教と祈祷	……	88
(1)	カルヴァンの祈祷論	……	88
(2)	内村鑑三と祈祷	……	91
(3)	『足ながおじさん』	……	92
第八章	祈祷の要・不要	……	94
(1)	弥陀の本願こそ祈祷		
	——曾我量深の所説——	……	94

(2) 心からの信頼の発露

—三谷隆正・植村正久— …… 95

〈注〉 …… 99

(三) につづく

第六章 祈祷禁止をめぐって

(1) 徹底せる罪惡觀のゆゑに

—普賢大圓の所説—

ここで、上乗の真宗へ無祈祷の論旨を、宿老へ普賢大圓の声でたしかめておきましょうか。〔真宗教学の諸問題〕昭和三九年、百華苑。普賢は真宗先達の古文獻を総括して、真宗が現世祈祷を禁ずるの理由をまとめています。

一、弥陀を始め諸佛菩薩及び諸天善神の守護にあずかるが故に。

二、定業は転ずべからず、且つまた転ずべきは転重軽受せしめ、非業の横難はすでにこれを払うが故に。

三、凡夫の迷情をもつては、祈祷の効なきが故に。

四、真宗の行人は念仏の功德として現益を得、今更改めて求願するの要なきが故に。

五、真宗念仏者は雑行をすてて、一心一向に弥陀を念ずべきが故に。

六、真宗念仏者は、厭穢勵淨して現世の寿福を求むべからざるが故に。

七、真宗の信仰は信仰の対象たる仏に絶対信賴し、毫も我相なきものなるが故に。

と。しかも、これを二由に総括する。

イ、法を信ずること絶対的なるが故に。真宗の信仰は専ら本願力に全托して、毫も機のはからいを雑えざるところ

にその特徴がある〔五、六〕。また仏の本願力に全托することは、やがてその威神力を憑み、その守護を確信することになるが故に。〔一、二、四〕。

口、機を信すること徹底せるが故に。真宗の信仰は自己の罪惡を觀することに於いて徹底せるところにその特異性がある。仏に祈祷をなし、その効果あらしめんとするは自己の祈願に一種の力を認めるものである。真宗の行者は徹底せる罪惡觀の所有者なるが故に、自己の力によって、その祈りに効驗あらしめんとするが如きはなし。すなわち凡夫の祈祷は無効なることを熟知するが故に、現世を祈ることはない筈である〔三〕。

この二由はやがて真宗の二種深信(機の深信と法の深信)に合するものであつて、真宗に於ける現世祈祷禁止の理由はこれで尽きている(四二一、二頁)

と。

また、法然や親鸞に現世祈祷を許すが如き文言あることについても。

「念願とか期待とか要期とかの意であつて、祈祷請求の意ではない。」「御消息集」における『念仏を廻向する』とか、『世のいのり』のために念仏するとかいうことは、何れもともに信後報恩の化他廻向たる常行大悲であつて、『念仏ひろまれかし』と念願しつつ要期しつつ弥陀仏名を称えることである。」「高祖の御消息の外に、善導大師の著述や、法然上人の語灯録等には現世の祈りを許すが如き類文は処々に散見するが、それ等は一機一縁の方便説として曾し去るべきものである。高祖すでに嚴乎として『和讃』及『本典』に於いて、現世祈祷を禁止し給える上は、これを準繩としてすべてを律すべきである。(四二四—四三三頁)

と。

以上の趣旨は前段で見た諸師と異口同音でした。ところで、凡夫性のあくなき追究と告白——これが親鸞教の特色、あるいは存在理由であり、またそれゆえの(無祈祷)の論理が展開された次第でした。「浅薄な人間の知識や、か弱き人間の能力をもつて祈願祈祷し、その自力の廻向によつて利益を授かろうとするが如きは、畢竟宗教的真理の大法の

絶対的実在たるを無視するものであって、認識不足も甚しいものというべきである。云々」と、大上段でした（大原性実）。

しかし、ここにいたって、その論旨に疑義を挿みたいのです。すなわち、言うところの（無祈祷）の論理は、ひたすら人間の「浅薄さ」「か弱さ」の基盤の上に組み建てられたわけなのに、一旦、（無祈祷）を展開する段となるや、その基盤である人間の凡愚性が一蹴されているということについてです。「浅薄な人間の知識やか弱き人間の能力」などと、これを蔑視し、精一杯唾棄すべく斬って捨てた時、論者は今の今まで立っていた卑薄、懦弱なる人間の凡愚性という地平を蹴って、一気に乖離してしまっている。人間の愚鈍下智のほどが後ざまに斬って捨てられ、いきなり硬直した強者に変じ、優等生的「智者の振舞」に切り替っている。

——その点についてです。

「真実の祈は人間に恵まれていない。人間の祈は総て虚偽である。」と断罪し、「宗教が高等であるだけ、殊に祈祷と言う文字に現れた卑しき信仰は、其の色彩を薄めなければならぬ。」と断ぜられる時（島地大等）、論者はおのれもその一員である人間の凡愚性を、下等の、卑しいのとして、一気に斬り捨てる。「虚偽」、「不真実」な凡夫の立場と、いきなり無縁となり、言うところの「高等」な賢善・智者の立場に舞いあがってしまっている。人間の愚痴性は一挙に捨棄されて。そこに到って人間本来の痴愚性のラインは捨棄されて一貫されない。

もとより、そこには「絶対無上の大法の絶対実在」なるものが措定され、「阿弥陀仏の偉大なる願力即ち大祈祷力」あつてのこととしても、です。愚かにして、卑しき人間は、愚かにして卑しきままでありつづけるのに、その実体が切断され、論者はいつの間にか飛昇している。親鸞教学の凡夫の論理は（無祈祷）論において、貫徹されず、そこにわだかまる課題処理もはかられず、一概に愚劣なりと擯斥されて、賢明の論理に韜晦してしまふ。今の今までの愚人は、途端に智者気取りと変ずる。

——ここで言いたいのは、人間の暗愚・不実性が、だからと言って賢明の利剣によって切断抛棄されうるのか。それとは別の道が開けないのか、と言うことなのです。たとえ、阿弥陀仏の慈悲の絶対なるを信仰し、また己れの不実

を認知しつつも、へな祈らんとする。人間の凡夫性は問題にされない。受けつけられない。それを、愚劣なることとして閉口させる阿弥陀仏。人間ごときの願訴、祈祷などという下等、無用かつ有害なるものは……と封緘する阿弥陀。なおも凡愚なる人間の祈祷に傾ける耳をもたぬ阿弥陀。親鸞教学は、その得意なる「無祈祷」論において、人間の凡愚性を貫徹しえない。

この不貫徹、不徹底は、実は「祈祷」論におけるばかりではない。その浄土往生論においても見られるところであった。すなわち、あれほど、人間の極重悪性を赤裸々に追究自白しながら、挙句の果て、浄土においては極悪の凡夫も「弥陀同体」と化す、とする。「己身弥陀」と昇華する、とする。他力本願の思想は、究極において、人間追究の鋭鋒を鈍磨し、ついには落下させて終わる。

そこには、「汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。」「汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふ。」（マタイ六・八、三二）ことを信じ、「御意の天のごとく地にも行はれん事を。」と祈り、「マタイ六・一〇」、「我が意のままにはあらず、御意のままに為し給へ。」とさえわきままつつも「マタイ二六・三九」、たとえば、あの獄中の使徒ペテロ死刑前夜につづけられた信徒たちの、それこそ不真実な祈りがゆるされる世界。しかも、それに耳を傾けるキリストの世界はあらわれるべくもない。「使徒の働き」一一・一〜一六。聴くもはずかしい祈りの中に、千分の一、万分の一の真情を拾いあげて応答される世界は阿弥陀の世界には見るべくもない。みずからは全知全能にして、大慈大悲でありながら、不束、不届な罪人らの浅薄で虚妄なる祈りをゆるす世界。ゆるすどころか、すすんでそれを聴聞する救主の世界は、親鸞教学には見られないのです。凡愚な人間の野にして卑なる祈祷など有害無用、不届千萬として唾棄されるのです。

(2) 常に二重の赦しが

— カルヴァンの所説 —

宗教改革者カルヴァンは『キリスト教綱要』（Ⅲ・二〇）において、「正しく祈るための四原則」として、聖書から、

(1)敬虔な態度、(2)饑え渴き、(3)自己放棄、(4)希望の確信を、正々堂々と展開したのち、「それらが極度に厳格に要求されて、燃えあがる熱誠と、正しく整えられた願いとをともなう、完璧な信仰、あるいは完全無欠な悔改めが見いだされない祈りは、神に拒否される、という意味ではない。」と付け加えました。(一六)

そして、人間の現実を告白して行きます。

「いまだかつて何びとによつても、それにふさわしい完全さにおいて果たされたことはない。たとえば、一般の人々のことはさておき、ダビデの場合、いかに多くの不平が彼の祈りの不節制ぶりをおわせていることか。」

「神はわれわれのたどつたどしい片言を忍び、われわれの口から無分別なことばが飛び出すごとに、この無知にも赦しを与えたもうのである。たしかに、このような寛大さがなければ、祈る自由は少しもない。」

「聖徒たちも、しばしば神の御言葉の規範に従つて正しく整えられていない願いごとを溢れ出させる。」

「さらにまた、かれらの精神が散漫になつて、すぐにも消えてしまうようなことも起こる。したがつて、この点についても赦しを与えられる必要がある。彼らの祈りが弱りはてたり、断片的になつたり、中断されたり、散漫になつたりして、拒絶されることがないために。」

「たとえ手を挙げているときでも、自らの心のゆるみを意識しない人がどこにあらうか。すなわちかれの心は地にすわり込んでいるからである。」

「『神の喜びたもう供えものは、打ち砕かれた靈魂である。神よ、あなたは痛悔し、卑下する心を、決してあなたにたまたまない。』(詩五一・一九)と言われるが、その供え物の、十分の一も捧げていないことを認める。このようにして、常に二重の赦しが請い求められなければならない。つまり、聖徒たちは多くの罪過を自覚しているものの、しかも、かれらの感覚には、自己をまさにふさわしく嫌悪するほどの印象もなく、神のさばきの座で清算をつけることがないかのような、ぐずぐずした願いしかない。」

「何よりも信仰の弱さ、あるいは不完全さは、もし神の寛容によつて支えられないならば、信仰者は祈りを無効にしてしまふ。」

「神の前に己れを差し出し、その御自身の前に現われるにふさわしい人は一人としていない。それゆえ、天の父御自身がわれわれすべてのものたましいを投げ倒さずにはおかぬ、この恥じらいと恐れから、われわれを救い出すために、御子、われわれの主なるイエス・キリストを与えたもうたのである。」(一七七)

「汚れないとは、どうしても言えない祈りも、仲保者の血を注がれることによって潔められる。」(一七八)

と。こうして〈祈祷論〉は、唯一の仲保者イエス・キリスト論へと突入して行くのです。

キリスト者が、その祈りを「イエス・キリストの御名によって」ささげるのは何ゆえか、と問われるならば、「汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給はんためなり。」のみことばによることは申すまでもありませんが(ヨハネ一四・二三)、わが祈りの中の不純・不実が贖主によってゆるされること。また、不純・不実が仲保者によって除去されること。純真・真実——もしそれがあるとすれば——が救主によって増幅されること、を願うてのことなのです。

カルヴァンは、こうして〈祈祷論〉を結びます。「国と、力と、栄えとは限りなく汝のものなり。」について、

「(二)においてこそ、われわれは自らの信仰の確乎とした、静穏な安らぎを得るのである。すなわち、もし、われわれの祈りが自分自身の価値によって神に捧げられるとすれば、ただ低く口ごもって言うだけでも、誰が敢えて神の前でなし得るであろうか。今や、われわれはどんな悲惨の極みにあり、あらゆる点で最も無価値であり、いっさいの推薦を欠いているとしても、しかも、われわれから祈る理由が取り去られることなく、信頼がなくなることはない。なぜなら、われわれの父から、その王国と、力と栄光とを奪い去ることができないからである。」

〈四七〉

これあるかなや、です。私たちは、無分別で、ごたごたとした散漫な、ゆるんで、ぐずぐずした不完全な祈り、まこと御前に恥ずべく、恐るべき祈りを仲保者なる救主の赦しをこうむり、神の寛容をたのみとして、祈りつづけてよいのです。

祈りの最後に唱える「アーメン」という小さな言葉は、どういう意味ですか、という問いに、『ハイデルベルク信仰

問答』は次のように答えています。「アーメンというのは、これは、真実であり、確かであるにちがいない、ということでもあります。なぜなら、わたしの祈りは、自分の心の中に、自分がこのようなことを、神に求めている、と感ずるよりも、はるかに確かに、神によって、聞かれているからです。」(二二九問答)。「彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。」はその引照聖句でした(ヘイザヤ六五・二四)。

第七章 キリスト教と祈祷

すでに、私たちは親鸞教学流の無祈祷論の程を見ました。その挑戦を受けて、キリスト教世界にも同様ないし類似した「無祈祷論」はなかったのでしょうか……すると、あつたのです。当然あつたのです。神は全智であられ、全能であられるという視点からすれば、その神への祈祷を云々する議論、つまり無祈祷への傾斜を示す主張・意見・底流は、何も日本の親鸞をまつまでもなく、キリスト教世界にすでに存在していたことを発見して興奮を覚え、かつはまた当然なことかも知れないと、うなずくのです。

(1) カルヴァンの祈祷論

十六世紀の宗教改革者ジャン・カルヴァンは、その主著《キリスト教綱要》において、

神は、通知を受けることがなかったならば、われわれがどのような局面で押し迫られており、何がわれわれの役に立つかを、ご存じないのであるうか。そこで、われわれの声によって目覚ませられるまでは、まるで神が目を閉じ、或いはむしろ眠りに落ちいつているかのように、われわれの祈りによって催促するとは、ある程度、無駄なことに見えないだろうか³⁶。

といった無祈祷論的傾向を論題にのせています。つまり、神の全智性のゆえに人間の祈祷を無駄事としたり、開き直つては、それは神に対する冒瀆行為ではないか、とまで強弁する議論は、すでにキリスト教内部において対決済みであつたのです。キリスト教は、そのような思潮の挑戦を受け、それを乗り越えて、今日まで祈祷を高くかかげて来たことをたしかめうるのです。

今、カルヴァンの所論に聞きましょう。彼は、まず神が祈祷を定めたもうのは、

御自身のためではなく、むしろ、われわれのためであつた。

と、当然、述べたのち、

われわれがみずからの悲惨に対して麻痺し、かつ鈍感である時にも、神はわれわれのために見守つて夜を徹し、われわれの願い求めるのを待つまでもなく、しばしば救助したもうとは言え、われわれが彼に絶えず祈願することは、われわれにとつてきわめて大切である。

そのゆえんは、として、以下、六つの理由をあげました。

第一に、それはわれわれの心が常に神を求め、愛しあがめようとする真剣で熱烈な願いに燃やされるためである。すなわち、われわれがいつさいの窮乏のただなかにあつて、いわば聖なる錨に頼るようにならば、彼のうちにながれて行くことに習熟するのである。

第二に、神御自身を証し人として待つことを恥じるというような、いつさいの欲望や、いつさいの願いが、決してわれわれの靈魂のうちに忍び入ることがないためである。すなわち、われわれはすべての願いを彼の目の前に差し出

し、また、この心のいっさいを注ぎ出すことを学ぶのである。

第三に、われわれが心の底からの真実な感恩と感謝をもって、彼の恵みを受けいれる備えをするためである。すなわち、その恵みが神の御手からわれわれのもとに来るということ、われわれは祈りによって思い起こさせられるのである。

第四に、求めていたものが得られたときには、われわれの願いに神が答えたもうたことを確信し、それによって、いよいよ熱心に彼のいつくしみを瞑想するように動かされるためである。

第五に、同時に、祈りによって達せられたと、わかまえることどもを、いよいよ大いなる喜びをもって受け入れるためである。

第六に神の摂理がわれわれの弱さの尺度に応じて、祈りの実行と体験とを積むことによって、われわれの靈魂に確証されるためである。すなわち、われわれは神がわれわれを決して見捨てず、窮乏のその時点において、彼に呼ばれる道を進んで開くことを約束し給うのみでなく、常に手を差し伸べて、その民らを支えたまい、御言葉をもって彼らを欺くのでなく、現実的な助けをもって保護し給うことを理解するのである。

これを要約すると、神こそは神として、全智者として、私たちの求めるよりもさきに私たちの一切の必要を御存知であられるのであり、また慈愛の主として、私たち自身が気づかぬときにも、適切な救いと援助とをさしむけ給うのですが、にもかかわらず、私たちが神に祈ることが必要とされるゆえんは、

第一に、私たちが熱心に神を求め、願い、神のうちのがれゆくことに習熟せんがためであり、

第二に、私たちの願いの一切を聖なる神の前にさし出して、聖められるため、

第三に、私たちがすべての恵みが、神から来ることを覚え、それを受ける準備をするため、

第四に、神よりの手ごたえをえて、いよいよ神の慈愛を瞑想するため、

第五に、祈りの結果を大いに喜び受けるため、

第六に、神が現実に常に手をさしのべて私たちを支え、助けたもうことを理解するためであると、言うのです。そうです、それら一切において、神は御自身の愛を、ひたすら私たちに知らせ・理解させ・たしかめさせようと欲していたものです。私たちに手ごたえを与えて、私たちをしていよいよ御自身に頼らせ、聖め、備えをなさしめ、瞑想させ、喜ばせ、激励させようとしておられるのです！祈りは神御自身のためではなくて、ひたすらに私たちのためだ、というのです。

なんとも主體的に、おのれの心と神の御心のひだにわけ入つての言説でしょうか。彼カルヴァンが、神の神たるゆえんを知り、人間の人間たるゆえん、おのれのいかなる者かを、わきまえていたことを物語る神妙な言葉ではありませんか。今日、みずからの祈祷について内心慚愧たる者らは、この大宗教改革者の一文によって、再び祈りへの熱意をかきたてられることでしょう。そして、今日の神学研究の中でも、最も立ち遅れていると思われる祈祷論は、こうした点から掘削され、確立されること多大なものがあると思われるのです。

それはともかくとして、このような祈祷の條理と心理とを納得するとき、「夜も目覚めている神の摂理を、われわれの質問攻めによつて、せき立てることは無駄なことだ。」などという小ざかしくも索漠たる反祈祷論・無祈祷論の、実は貧寒・荒蕪さを見すかさざるをえなくなります。今一度、第六の理由としてカルヴァンがあげた、神の体温をさえ感ぜしめるような言葉を再読してみましよう。「すなわち、われわれは神がわれわれを決して見捨てず、窮乏のその時点において、彼に呼ばれる道を進んで開くことを約束し給うのみでなく、常に手を差し伸べてその民らを支えたまい、御言葉をもつて彼らを欺くのでなく、現実的な助けをもつて保護し給うことを理解するのである」とーただ、「おまかせ」の暗黙の了解あるのみでなく、いつでも、現実的・具体的に、私たちの呼ばわりに耳を傾け、手ごたえを与えて、励まし、支えてくださる神との応答の世界が、キリスト教の祈祷の世界だったので。

(2) 内村鑑三と祈祷

ここに、へ内村鑑三の言葉を参照しましょう。

私共は天の神は私共の父であると信じます。神とは天に高く留まって唯だ人間の運命を支配する丈の無情無感覺の者ではありません。神は私共に取ては凡の物の中最も近い者でありまして、私共の父母妻子や親友と雖も神の近きが如くに近い者ではありません。故に私共は度々此神と談話し、此の神に私共の憂苦を伝へ、又、或る時は彼の援助を乞ひ、彼の威徳を頌し、彼の偉業を讃へたく思ふのであります。是は天然自然の至情でありまして、神を識つて居りながら彼と語らないのは丁度父を識つて居りながら父と話を為さないやうなもので御座います。私共が神に祈る時は私共が此世の凡ての煩累を離れて彼と一緒に在る時でありまして、祈禱は私共の為すべき当然の事であると考へます³⁷⁾。

私共が祈禱を為すのは私共が此世以外にも生命を有するの証拠でありまして、此生命があればこそ私共は死ぬのを別段に恐れないので御座います。夫れでありますから私は少しの間でも祈禱を廢める事は出来ません。早晚私の臂が閉ちて物を言ふ事の出来ないやうになる時が来ります。其時には私は此世の最終の一言として私の神に祈禱を捧げる積りで御座います³⁸⁾。

(3) 『足ながおじさん』

ジン・ウェプスターの傑作、『足ながおじさん』の主人公ジルーシャ・アボットは、不図したことから百万長者の援助によつて、孤児院から大学へと進む恩典に浴しますが、その援助者の名は知らされません。もちろん、仕送りも着実に来ることによつて、保護者がいること、しかも慈悲ぶかい豊かな保護者がいることは、たしかめられるのですが、彼女は満足しません。すでに約束されているとおり、たとえ何百本、何千通の手紙を書き送ったところで匿名の保護者「足ながおじさん」からの返事はなく、応答皆無であることは承知でいながらも、なお嬉しいことや、悲しいことや、問題などを、親愛の情をこめた手紙で語りかけ、自分と共に喜び悲しむことを願ひ、苦しみを訴えるのです。そうです。彼女は十分に保護されながらも、保護者と語らい、交わることを切望しているのです。その都度々々

の保護者との会話、打てばひびく手応えを、彼女は熱望しているのです。

八月二十七日。あしながおじ様。おじ様は一体どこにいらっしやるのですか？おじ様が世界のどの辺にいらっしやるのか、てんで見当がつきませんけれども、このもの凄い暑さの間はニューヨークにいらっしやるのでない事を祈ります。おじ様は山の絶頂にいらして、（でもスイスではなく、もつとどこか近いところ）雪景色を眺めながら、私の事を考えていて下さるのだと思います。どうぞ私の事をお考え下さい。私はとても寂しくて誰かに自分の事を考えていて貰いたいです。ああ、私、ほんとうにおじ様にお会いしたいわ！そうすればお互い悲しい時には慰めあえますのにね。

九月十九日。ロック・ウィローにて。おじ様、ある事が起きました。それで私は忠告が必要なのです。その忠告を誰からでもなく、おじ様から伺いたいです。おじ様にお目にかかるのは不可能でしょうか？手紙に書くよりも直接にお話しするほうが、ずっとやさしいのです。³⁹

これです！沈々黙々として、これまた沈々黙々たる阿弥陀さまに、「ただ、おまかせあるのみ」と悟り顔して、千遍一律、「南無阿弥陀仏」のお念仏のほかは、一切口をつぐまざるをえぬ親鸞教学では想像も及ばないような神との親交・対応が、キリスト教徒の祈りには息づいていたのです。

第八章 祈祷の要・不要

(1) 阿弥陀の本願こそ祈祷

— 曾我量深の所説 —

これに対して、東本願寺派の耆宿（曾我量深）は、真宗に祈祷の必要なし、門徒に祈祷の要なし、と論じます。

私の真宗には祈祷を必要としない。有るか無いかと問ふときには、有る。必要とするかしないかといふ時には、必要としない。祈祷がないのではない、祈祷の要がないのである。祈祷がないということ、祈祷の要がないといふことは、意味を異にしていると思ひます。……この祈祷を要しないといふことを表明している言葉が不廻向といふ言葉であります。之は法然上人の言葉でありまして、法然上人の『選択集』の中に出てゐるのであります。選択本願の浄土宗に於いては不廻向宗である。不廻向といふことと無廻向といふことははっきり区別をしなければならぬのであります。世の中の多くの人は不廻向と無廻向とを混乱してゐるのであります。けれども之は違つて居ります。不廻向といふことは廻向しない、廻向しないといふことは廻向を要しないといふことであります。つまり廻向を俟たないといふことであります。^④

と、いつもながらの独特の言いまわしののち、畢竟、真宗の祈祷とは、法蔵菩薩、のちの阿弥陀仏が衆生のためにたてた四十八願が、それである、として、

『大無量寿経』の中に説いてありますところの法蔵菩薩の本願といふものは、その現はれてゐる形から申しますといふと、衆生の為に祈るところの仏、阿弥陀仏が我々衆生の為に祈るところの祈である。我々衆生が仏に対して祈るところの祈でなくて、仏が我々衆生の為に祈る祈である、即ちその祈といふものの方向が全く違つて居ります。

世間普通の祈は我々衆生が仏に向かつて祈る祈である。今弥陀の本願は仏が衆生の為に祈るところの祈である。：そこで浄土真宗に於ては、仏が衆生の為に固より祈る祈があるのであります。それ故我々衆生が今事新しく仏に向かつて祈る必要はない。祈ることを要しないのである。かういへば、一通り解釈はついたと考へることができると思ふのであります^④。

如来の本願は純粹純正な祈である。純正な祈といふのは一如の祈である。一如の祈は本願が本願自身を具体化し、同時に本願が本願自身を対象化してゆくののであります^④。

真宗とは何ぞや、真実の祈といふことであります。偽の祈に対して真実の祈を宗とするのであります。宗教とは祈祷である、真宗とは真実の祈祷である。『如来の本願を説くを經の宗教とす』と親鸞がいはれたのもその所以であります^④。

もうやめましょう。要するに、祈祷とは阿弥陀如来の本願であり、それがある以上、人間の側よりの祈祷は不必要であるというにあります。

(2) 心からの信頼の発露

—三谷隆正・植村正久—

しかし、これに対しては、まずへ三谷隆正の次の一文が、曾我師の論調にも似た調子で、よくキリスト者の祈祷観・祈祷感をあらわしているように思われます。

然らば——と理屈ばき我らの友は言ふ——我らが神に祈り求める必要はないではないか。

機械的なる合理主義の非人格的なる論理を以てしたならば、なるほど必要はないかも知れない。さうして必要のない事はやらないといふのが、最も賢明にして合理的なる能率増進的打算であるかも知れない。然し人間の靈は必要とやらいはる、丸葉だけで生きてゐる動物ではない。信仰の問題は靈の奥底の問題であつて、それは必要の必要といふ算盤勘定とは全然別な問題である。我らは我らの父なる神が我らのために慮りたまひて、我らのみづから配慮し得るより以上に懇切でありたまふことを知つて居るのである。機械的功利的ではなしに、心にしみて知つて居るのである。非人格的なる打算に於いて神的配慮の有効度を心得て居るのではない。人格的に親密なる關係に於いて、心からなる信賴の情を神にささげつつ疑わないのである。神こそは我らの必要なるものをすべて知りたまふ。神こそは瞬時のためになしに我らを見とりたまふ我らの頼り所である。この頼り所を措いて我らは何に頼らう。求めざるに既に知りたまふ程の神に頼らずして、他の何者にか頼り得よう。我らにとつては、神が我らの祈を必要としたまはぬことそれ自身が、我らをして他の何ものを措いても先づ神に頼らざるを得ざらしむる根本の理由である。祈る必要はないかも知らぬ。然し、恰もその故に我らは専ら父なる神に向つていのる。然り、彼に向つてのみ祈る。さうして我らのその祈りが、必ず常に聴かれ、又は聴かる、以上に聴かれて過たざるを知つて居る。

かゝるが故に、我らの祈は我らに冷淡なる者をして、強ひて我らに注目せしめんが為めの心細きさがみではない。常に我らのために配慮して親切を極むと我ら自ら知る彼に対する、心からなる信賴の発露である。さればこそ我ら祈らんとするとき、父よとの呼びかけは極めて自然にして且当然である⁴⁴。

而して我らが祈る時神に向つて父よと呼びかけよといふことの意味は、上述の如き父性を有つ者として神を仰げよといふにある。即ち神が我らの父であるといふことは、神が我ら一人々々の独自なる個性を記憶したまふといふことである。神の前には我ら人間が一人々々かけがへなき独自性を有つ者であつて、決して機械的非人格的なる評価の対象たるものではない、神は決して人間を十把ひとからげに概覽したまはないといふことである。看よ、野末の名なし草の見ばえなき花の姿にさへ、いかに豊なる個性の盛られてあることか。神は野の草をだに十把ひとか

らげには装ひたまはなかつた。況んや人間をや。没個性的劃一は丸ビルと官僚と凡て余りに人間的なる小細工の爲す所であつて、神の造り営みたまふ自然は、一羽の雀さへ其れ個性価を無視せらるゝ事がない。況んや人間をや。天に在す我らの父は、我らの一人々々につき、その独自なる個性価を惜みたまひつつある。その事が即ち『神は愛なり』といふことである。また『求めざる前に我らに必要なものを知りたまふ』といふことである。即ち我らは一人々々親しく神に識られたる個である。斯く個人的に識られたる我らとして、又どうして個人的なる親しき呼びかけを父なる神に向けずして已み得ようか⁴⁵。

さて、論旨は、いささか文学論じましたものになりましたが、ここにもう一人、植村正久牧師の眞率・純真なる一文をあげてしめくくっておきましょう。

古の人は思うこといわざれば腹ふくるる心地せらるとて、或いは地を穿ち、これに向かいて心のうちを吐き出せることありしかや。詩人バーンスにもこれに類せる逸事あり。彼はその胸に浮かべる思想・感慨をうち出して人に告げんと欲すれども、或いは誤解し、或いは驚き恐れ、甚だしきは我を悪むに至るものもやあらんとの氣遣いよ、心隈なく語ることを憚り、止むを得ず、思うことを紙に認めてせめてもの心遣りとはなしたり。我らは限りなきの思いに充たされ、この心誰にか告げんと嘆息する場合なきこと能わず。或る時は無心の花に涙を濺ぎてわが胸中を訴え知らすることもあるなり。この時において、天にひとりの活ける神あり。わが眞誠を尽くして、心にあることを隈なくこれに告げ、所謂靈なる交通、談話をなすことを得るの眞理を悟らば、また大いなる幸いにあらずや。人のためにもわがためにも謝し、祈り、語り且つ告白することを得。キリスト教徒の祈り、あに軽んずべきものならんや。人類の義務ここにあり、喜ぶべきの特権ここにあり。靈性修養の道ここにあり、安心立命の基礎ここにあり。希くは我らの生涯をして祈り多き生涯たらしめよ⁴⁶。

ともかくも、興味津々たるのは、キリスト教界きつての繊細なる紳士・三谷隆正と磊落なる伝道者・植村正久との中に、愛らしき少女ジル―シャ・アボット嬢の面影と口ぶりとを発見することであり、また微笑ましからずや、なのです。

もとより、キリスト教の祈りは、キリスト自身が私たちに祈りの手本として示された、主の祈りにもある通り、まず天を仰いで、神の御名、神の御国、神の御意の尊崇・到来・成就を祈ったのち、私たちの日用の糧、罪の赦し、誘惑の廻避、悪よりの救助の願いとなるのであって、神本人末というか、まず神、しかして我れら、の順序は厳として動かすべからず、ゲッセマネの園でのキリスト自身の祈りに示されているごとく、「父よ、みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」という、神意に厳肅に服従したものでありますけれども、また、神の栄光は無為に空中に放電消散するものではなくして、私たちが人間俗事の間に結実するものなのであって、戦争の終結のために、という公的な、いわば大きな祈りから、友人の病苦よりの回復のため、あるいは、今日の糧のため、と言った私的な卑小な祈りをも自由になしうる、否、なすべくしてなしつつ、一切を神に仰ぐ敬虔さと親密さとを、どうして貶価することができましようか。かかる祈禱の高く、深く、広く、親しき意義を、無祈禱を得意として、その「絶対的帰依」なる一見高級な悟達とも見えて、その実は小さかしくも、乾涸びた抽象論の前に引込めてよいものでしょうか。

〈二回につづく〉

〈注〉

②⑥ カルヴァン著『キリスト教綱要』三の二〇の三

③⑦ 『内村鑑三全集』1、四〇四頁。

③⑧ 同右書 四〇五頁。

- ③⑨ ジーン・ウエプスター著『あしながおじさん』（松本恵子訳・新潮文庫）二〇七～二〇九頁。
- ④⑩ 『曾我量深論集』（丁子屋書店）第四卷「内観の法蔵」三二八～三二九頁。
- ④⑪ 同右書 三三三～三三四頁。
- ④⑫ 同右書 三六〇頁。
- ④⑬ 同右書 三七二頁。
- ④⑭ 『三谷隆正全集』（岩波書店）第五卷 一四二～一四四頁。
- ④⑮ 同右書 一四五頁。
- ④⑯ 『植村正久著作集』5、二五八～二五九頁。

[Abstract in English]

Prayer and Non-Prayer (II): A Comparison of Christianity with True Pure Land Buddhism

S. Obata

The True Pure Land sect, inaugurated by Shinran, insists on the uselessness of prayer, or, the theory of non-prayer, because of its thoroughgoing criticism of the falsehood of human activities and of its propagation of absolute dependence on Amitabha. How can Christianity respond to the masterful opinions of the Buddhist scholars affirming this view? This essay reexamines their teachings on prayer and rereads the Christian Bible in contrast to them.

〔日本語要約〕

祈祷と無祈祷（二）

—— キリスト教と親鸞教の対比 ——

小 畑 進

親鸞の〈浄土真宗〉は、人為の虚偽性に対する徹底的糾弾と、阿弥陀佛に寄せる絶対的信頼ゆえに、〈祈祷不要〉・〈無祈祷〉を立場とする。

それにつわる諸賢の達人的所説に対して、キリスト教は如何なる応答をなそうるか。諸家の祈祷論を再考し、いまいちど聖書を読み直してみる。